



1 鈴木屋敷の弁慶

紀宝町鮎田の相野谷川沿い（オレンジロードに入り最初の橋を渡ったところ）にある鈴木屋敷跡には弁慶の言い伝えが残っている。昔、この屋敷にあったクスノキに大きな洞があり、ここで弁慶が生まれ育ったという。またこの屋敷のすぐ上流の相野谷川の支流湯之谷川には、弁慶がおじやみをして遊んだといわれる「ひふみ石」と言われる大きな玉石が三個ある。（詳細は2011年10月「おくまの2号拙著『相野谷川流域探訪』」）

さらに新宮には神倉山の袈裟岩（弁慶の刀取といわれる、1-A）や熊野地の新宮十郎行家の屋敷跡から出てきた石（現在、速玉大社にある。弁慶の下駄の跡といわれる、1-B）があり、弁慶伝説には事欠かない。

2 丹鶴姫と黒いうさぎ

昔、夕暮れ時にお城で遊んでいると、丹鶴姫が現れて子どもはさらわれてしまうと恐れられていた。そして黒いうさぎがさつと茂みから走っていくのを見ると、みんな「丹鶴姫が出てくるぞ」と言って走って帰った。黒いうさぎは丹鶴姫のお使いであると知られていた。また、丹鶴姫は男の子が好きなので、特に男の子は、夕暮れになると急いで家に帰ったという。（詳細は1996年9月新宮市広報、『わんぱく時代』佐藤春夫著）

3 頭八咫鳥神社の由来

神武天皇が熊野に上陸したとき、瘴氣にあてられ、全軍は氣を失った。それを高倉下命が剣をもって救い、さらに天より派遣された八咫鳥が熊野吉野の山岳を通り、奈良県宇陀地方まで案内したという。その八咫鳥を祀っている神社（現在、住宅地）。その後、お城の中に祀り込まれ、明治後期に、阿須賀神社に合祀された。（『新宮町郷土誌』）

さらに神武天皇の屯所と伝説のあるところが渡御前社（3-C）である。その背後に龍鼓の滝がある。（『新宮町郷土誌』）

4 阿須賀神社の言い伝え

熊野川の川口が塞がったとき阿須賀神社の神前で御湯を上げ、御供えなどをすれば、たちまち白キツネが現れてこれを喰う、そうすれば船の出入りは自由となる。また、新宮の浦で伊勢大浜の物語をしない、すれば川口がすべて塞がり船の出入りはできなくなる。病人があるときも、この神前で御供えしたら、本復するときは白キツネはこれを食べ、そうでないときは白キツネはこれを食わない、と伝えられている。（『新宮市誌』『旧記古文書・紀南郷導記』）

5 喜三郎山の大六キツネ

中熊野地の端に喜三郎山という小高い丘があった（現在、王子製紙跡地のあたり）。そこにいつからか大六と呼ばれる古キツネが住んでいて住民から親しまれていた。ある日、姿が見えなくなりついに忘れられていった。数年後、熊野地の住人の一人が京都の伏見稲荷へ参拝したところ、その大六キツネが現れ、「熊野を出て数年、いまはこの地に眷属ができてしまいいつ戻りたくても帰れない。お前の顔を見てなつかしくなって姿を見せた」と言って姿を消した。

その後、喜三郎山の山上にあった畳石を破砕して家を建てた人がいたが、毎晩、小さな石が投げ込まれだんだん激しくなったが、だれが投げたのかまったく分からなかった。人々は「これは大六キツネの住処を壊したからに違いない」と恐れて、山上に稲荷を祀り供物を捧げたところようやく投石はやんだという。今でも烏帽子岩と呼ばれる大きな石のもとに稲荷が祀られている。（詳細は1996年7月新宮市広報、『蓬萊見聞記』坂本可水著）

8 玉の井の橋と夜泣き地蔵

昔、中熊野地の南端に玉の井の橋があった。ここに夫婦者が住んでいたが夫は他国へ行ったままなかなか帰って来ないので、妻はついに暮らしかねて川に身を投げて死んでしまった。それから女の霊がこの橋のたもとに現れ、通りがかった人が出会えば必ず病気になるので、夜、ここを通る人はいなくなってしまう。その後、夫がやっと帰ってきたが、女の霊はもうなくなつたか何も伝わっていない。ただ、女が身を投げたときに詠んだ歌だけが伝わっている。「朝夕に、見ればこそあれ熊野なおく白露の玉の井の橋」「埋もれて渡りかねたる浮世をばみがきてもみよ玉の井の橋」

またこの橋のたもとに地藏菩薩があり、子どもの夜泣きの祈願をして、治つたときには紙のぼりを奉納してお礼参りをしたそうで、いつからか夜泣き地蔵と呼ばれるようになった。玉の井の橋も川もなくなつたが、このお地蔵さんだけが今でも残っている。（詳細は1996年12月新宮市広報、『蓬萊見聞記』、『新宮町郷土誌』）

新宮の民話と伝説（上）

平成25年6月 山崎 泰 作成

6 田鶴原（古くは現在の池田・蓬萊・徐福付近をす）の弘法大師

弘法大師が、新宮に来て田鶴原を過ぎようとしたときこの原に大木があった。その上に鶴が群れをなして子育てをしている。その木陰に老翁がたつて大師に「我は神宮の神なり。この大木を伐り、わが内証仏を彫刻して業病難化の人々を救済したまえ」と告げて消えてしまった。大師は人夫を集め、その大木を伐り、本尊阿彌陀如来、薬師如来、千手観音の像を刻み、近くの小高い山に草堂を創建し、それを丹鶴山東仙寺と号した。

その後、平安時代末期、熊野別当教信の妻女立田腹（または田鶴原、のちに鳥居禅尼）公が剃髪出家し、衰退していた寺を再興した。のちにこの女性を丹鶴姫と呼ばれる。（『新宮町郷土誌』）

9 清水元の弘法大師

昔、弘法大師が熊野三山に参詣する途中、喉がかわいたので下熊野地のある農家に立ち寄って水を乞うたが、垢にまみれた姿を見て「塩水だから飲めたものじゃない」と断つた。「それでは仕方がない」といって杖で地面に穴をあけるとそこらこんこんと清水が湧き出すとともに下熊野地の井戸の水はすべて塩水になってしまった。村の人たちはあの僧が弘法大師だと気がつき、その清水の湧き出している場所に大師堂を建立した。それからいかなる日照りでもこの清水大師堂の水は枯れることはなかった。（詳細は1996年8月新宮市広報、『蓬萊見聞記』）

10 浮島の森のおいの

昔、浮島の森に父娘で来て芝刈りをしていたとき、お屋になって弁当の箸を忘れたことに気がついた。娘は森の中に入って、箸の代わりになるものを捜している。穴から大蛇が現れ、おいのを飲み込んでしまった。今でも、おいのが飲み込まれた「蛇の穴（じやのがま）」が浮島の森の真ん中にある。俗語に「おいのみたけりや蘭之沢（いのど）に」ざれ、おいの蘭之沢の蛇の穴（じやのがま）へ」と歌われた。（『熊野よいとこ』浜畑栄造著）

11 神倉山麓の庚申の滝

平家物語に「三位入道維盛新宮へ参られ神の座を拝み給ふに岩礁高く聳えて嵐妄想の夢を破り瀧水清く流れて塵埃の垢をすすぐらんとも覚えたり」とあるが、これは社務所の横にある瀧のことである。（『新宮町誌』『神倉神社』）

12 神倉山の天狗

昔、2月6日のお燈祭りの夕方になると神倉山で大きな音がした。これを「天狗様が暴れている」と町の人は言って、武士・町人を問わず非常に畏れた。このとき、神倉聖が太刀を佩き銭をふるって指揮制御をし「アンマリアレシヤンナ」と一喝すればその響きはたちまちに止んだ。さらに聖様がお燈祭りの行に入れば、必ず天狗が邪魔をしに来ると伝えられている。

また、葬式のとき、南谷の墓地まで埋葬に行く途中、大道のはずれにかかったらカゴをかついで一目散に走り出す。神倉山の天狗が死人をさらうにいくと信じていたのである。（詳細は1997年2月新宮市広報、『新宮あれこれ』永広柴雪著、『新宮町郷土誌』）

13 越路の大猿

昔、男が木を伐り集め夕方になったので新宮の町に帰ろうと、越路にかかったとき、木の上から二メートルにも及ぶ大猿が「以前、お前が権現の芝で相撲をしていたのを木の上から面白く見物した。どうだここで勝負をしてみないか」と声をかけた。男は承知して、背中から伐木を下ろすと、「腰の山刀も危ないから取れ」と言われ、それもとらず。男に一回り小さな猿が挑んでくる。やつと組むと、男はすてんと転がされ、さらに挑むとまたも放り投げられる。大猿はそれを見て「弱くなったな」と言って、家来の猿を連れて森に消えた。男は呆然として町に帰った。（『老の寝覚め物語』宇井弼珠著）

14 御手洗の天狗

平らなる磯の上に盟のような三つのくぼみがあり、いつ頃からか天狗がきて身を清めたと言われている。魔所として人々はこを怖れて近づかなかつた。この三つの盟のようなくぼみから「みたらい」と地名がついたとも言われる。（『紀伊統風土記』第3巻）

15 高野坂の天狗の火

昔、那智山に参ろうと数人つれだつて夜明け前に新宮を出て広角から高野坂に来たとき、遠くから火がこちらに向かってくるのが見え、話し合っているのが聞こえる。さては、これは天狗のお通りだと気がつき道端の低いくぼ地に道を避けた。履いていた草履を脱いで頭の上に乗せ、みんな平身低頭している横を、天狗の行列が過ぎていく。「引き裂け、引き裂け」という声がしたと思うと「ほつとけ、ほつとけ」という声がする。天狗の一行は、そのまま松明をかざして王子ヶ浜の方へ下りて行く。助かった、と顔をあげて王子ヶ浜の方を見ると、浜は松明であかあかとしていたという。昔からの言い伝えで、天狗の火に行き会ったら履物を脱いで頭の上におくと、天狗の目から見えなくなると言われている。（『わたしのふるさと紀州』山本秋広著）

16 高野坂のキツネ

伊勢国四日市豊玉稲荷の神官の語るところによると、ある日、夢の中にキツネが現れ、「われは紀州みわぎきに住むものであるが、この山に両頭の蛇がある。疑わしくは捕えきたらん」というので「捕えてみせよ」と言えば、一週間ほど後一匹のキツネが両頭の蛇をくわえてやつてきたという。その話を聞いた新宮の人はみわぎきとは「三輪崎」のこととキツネは高野坂の稲荷に祀られているものであると、といったという。（詳細は1997年4月新宮市広報、『蓬萊見聞記』）

17 鈴島の白馬

昔より鈴島に泊まるものなし、という。もし泊まるものあるとき、白馬が駆け出し騒いだという。この白馬は、昔、はるか海の彼方から一人の男を乗せてやつて流れ来たという。この男が三輪崎鍛冶の先祖だといわれている。（『熊野よいとこ』）

18 木ノ川の児ケ森

昔、児ケ森で子供が遊んでいると、いつのまにか知らない子が一緒に混じって遊んでいる。夕方になってみんな帰る頃になるといつのまにかその子供がどこへ行ったのか、わからなくなってしまう。それが毎日の事なので人々は怖れてだれもその森へ行かなくなった。（『三輪崎町誌』）

19 桑の木の水のアメノウオ伝説

昔、桑の木の水の近くの「ナマズ口の淵」に一軒の民家があった。ある日、見知らぬ旅人がやつてきて「鵜飼をしても桑の木の水の下に淵へは絶対鵜をいれないようにしてくれ」と頼んで帰った。それからというもの毎夜現れ、同じ事をいつて帰るので不思議に思い、ある日、試しに鵜を桑の木の水に入れたところ、大変大きな「アメノウオ」が現れ、鵜と激しい闘いになった。最後は鵜が勝って「アメノウオ」を生け捕りにしたが、それからというものたびたび通ってきた客はぶつたりと来なくなった。この客がアメノウオの化身だった。（詳細は1997年6月新宮市広報、『飛沫』創刊号、1991年12月）

20 高田のオオカミ

ある日、久留守孫総（くるすまごそう）が那智山へ参詣に行つたところ、烏帽子山でヒトツダラという一つ目で一本足の怪物に襲われた。そのとき、どこからかオオカミの群れが現れ、ヒトツダラを追ひ払った。孫総は嬉しさのあまり「私が死んだら必ずその死骸を進ぜよう。私だけでなく子々孫々に至るまで死骸を進ぜよう」と言った。しかし時が経つにつれ後悔の念が募り、死ぬ間際に死骸を持ち去れないように手立てを尽くしたが、葬つた翌朝、その墓は掘り返され遺体は運び去られていた。（詳細は1997年8月新宮市広報、資料「燔祭」26号、1985年、更谷義博著）